

平成15年度の漁況

安木 茂・道根 淳

1. まき網漁業

(1) 漁獲量の経年変化

図1に昭和35年(1960年)以降の島根県の中型まき網漁業における漁獲量の経年変化を示す。

2003年の漁獲量は約53,000トンで、前年をやや上回った。浮魚類の漁獲量は1989年をピークに減少傾向で、その主な要因としてはマイワシ資源の減少、マアジ・サバ類等、マイワシに替わる魚種の伸び悩みがあげられる。2003年はカタクチイワシ、ブリの増加により、前年の121%、過去10年間の54%と、2年連続で増加傾向を示した。

(2) 漁労体数の動向

中型まき網の漁労体数は、1969年には95ヶ統あったものが、徐々に減少している。この原因としては、漁労技術の発達や漁船の大型化などが考えられる。しかし、1990年代以降は、マイワシ資源の減少に伴う漁獲不振による経営の悪化が最大の要因となり、特に、2000年以降は減船事業の導入もあり漁労体数が急減している。漁獲量は2002年、2003年と増加したものの、漁労体数の減少には歯止めがかからず、2003年末の漁労体数は2002年より3ヶ統減少し15ヶ統となった。

(3) 魚種別漁獲状況

図3～7に島根県の中型まき網によるマアジ、サバ類、マイワシ、カタクチイワシ、ウルメイワシの漁獲量の平年(過去5ヶ年平均)と2003年の季節変化を示す。

① マアジ

2003年の総漁獲量は23,906トンで平年の78%、前年の100%となった。

過去5ヶ年の漁獲のピークは5月～9月の間であるが、2003年は9月、10月、12月にピークが見られただけでその他の月は低調に推移した。9月、10月、12月は2003年に発生した0歳魚が漁獲主体となっており、1歳魚以上の漁獲は低調であった。

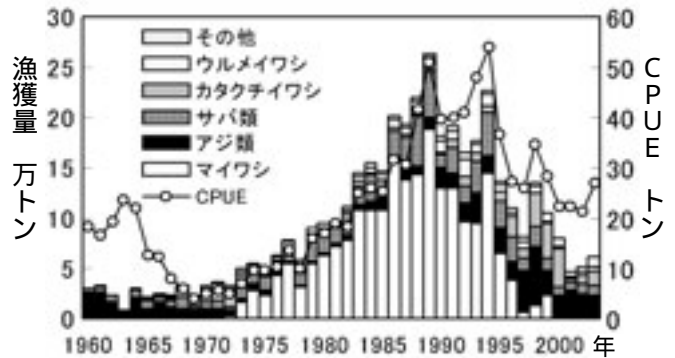


図1 島根県の中型まき網による魚種別漁獲とCPUEの推移
(2002年までは農林統計値、2003年は島根水試集計)

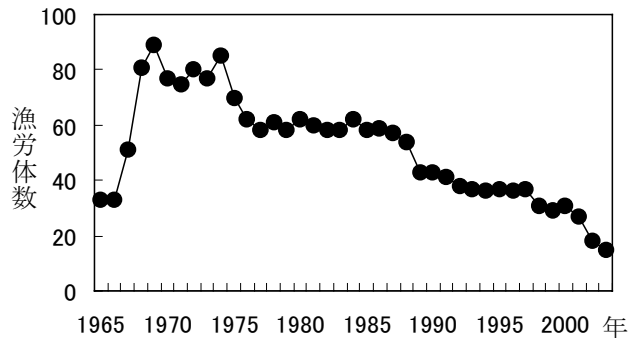


図2 島根県の中型まき網漁労体数の動向

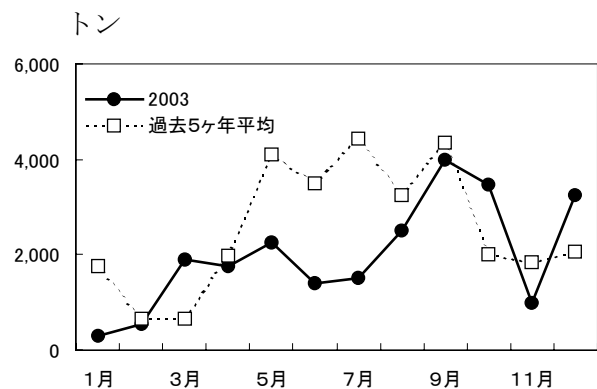


図3 中型まき網によるマアジ漁獲量

②サバ類

2003年の総漁獲量は8,941トンで平年の77%、前年の79%となり、平年、前年ともに下回った。漁獲の主体は尾叉長25cm前後の豆サバ(0~1歳魚)で、2歳魚以上の高齢魚の漁獲は少なかった。9月、10月に漁況が活発化した。11月以降急激に漁獲は落ち込んだ。

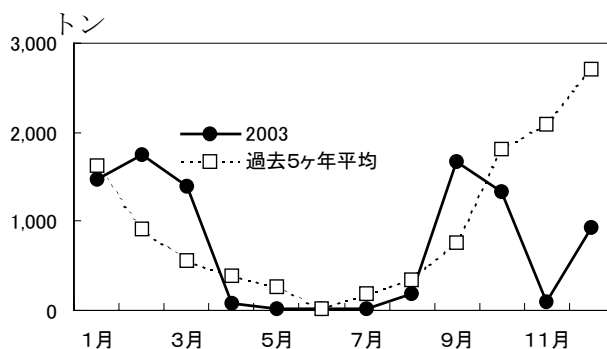


図4 中型まき網によるサバ類漁獲量

③マイワシ

2003年の総漁獲量は126トンで平年の2%で、ほとんど漁獲がなかった前年よりもやや漁獲量は増えたものの、依然として平年を大きく下回っている。マイワシ資源は全国的に低水準状態にあるが、太平洋側ではややまとまった漁獲が見られる。しかし、日本海側ではほとんど漁獲されておらず、資源の回復は当分見込めそうにない。

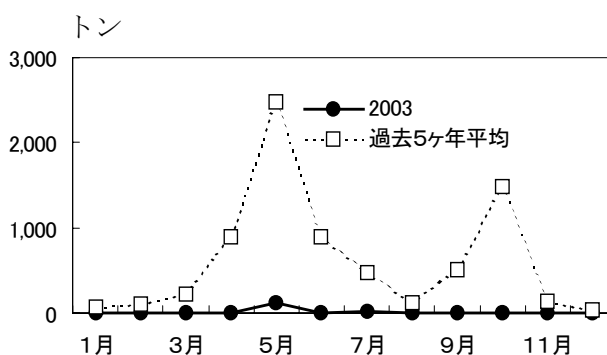


図5 中型まき網によるマイワシ漁獲量

④カタクチイワシ

2003年の漁獲量は14,429トンで平年の62%、前年の161%と2年連続の増加となった。カタクチイワシの漁獲量は1995年以降1999年までは、冬期を中心として3万トン台の高水準を維持していたが2000年、2001年と急激な不漁に陥っていた。2002、2003年と増加傾向にあり、資源の回復が期待される。

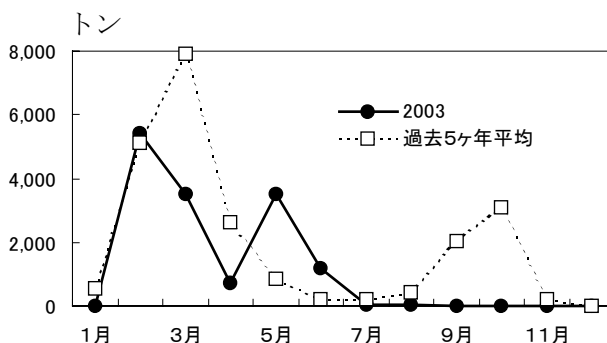


図6 中型まき網によるカタクチイワシ漁獲量

⑤ウルメイワシ

2003年の漁獲量は3,502トンで平年の93%、前年の91%とほぼ平年、前年並となった。月別の漁獲状況を見ると、平年は秋に漁獲のピークが見られるのに対し、2003年は春に見られている。ウルメイワシは回遊、成長、寿命といった生態的知見が他の浮魚類に比べ乏しく、資源動向を予測することは難しい。

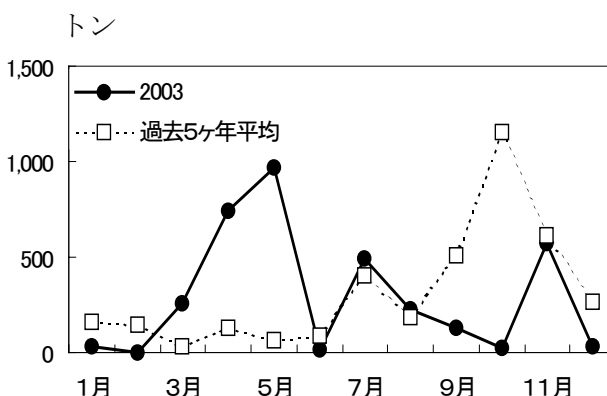


図7 中型まき網によるウルメイワシ漁獲量

2. 釣り漁業

(1) スルメイカ

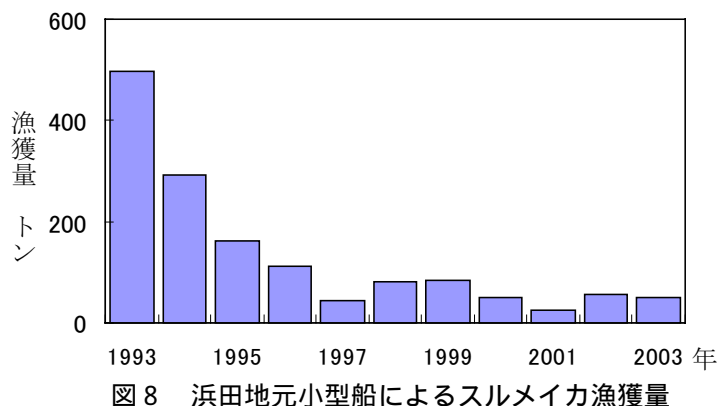


図8 浜田地元小型船によるスルメイカ漁獲量

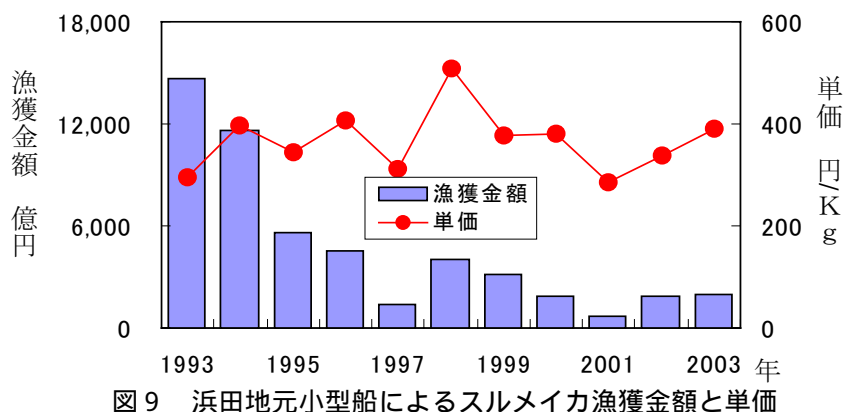


図9 浜田地元小型船によるスルメイカ漁獲金額と単価

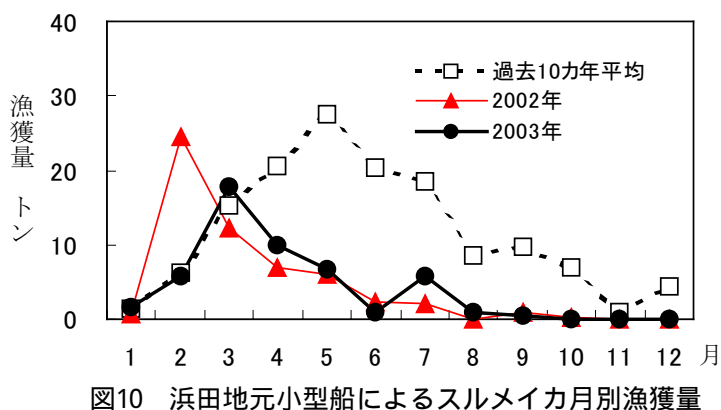


図10 浜田地元小型船によるスルメイカ月別漁獲量

島根県西部海域を主漁場としている小型イカ釣漁船によるスルメイカの漁獲動向を図8～10に示す。2003年の漁獲量は50トンで、前年(56トン)の89%、平年(過去10カ年平均:140トン)の36%とほぼ前年並みとなった(図8)。漁獲金額は1,954万円で、前年(1,900万円)の103%、平年(4,949万円)の39%となった。年間の平均単価は391円/kgで、前年(339円/kg)の115%、平年(353円/kg)の111%と漁獲量は横ばいであったものの、漁獲金額は前年をやや上回った(図9)。

月別の漁獲状況を見ると、2003年は3月に漁獲のピークが見られ、その後は緩やかな減少傾向で、6月以降ケンサキイカ漁が活発化するに伴い漁獲は終息していった。2002年は2月に活発な漁が見られたが、2003年の2月は平年並みで推移した。2003年の夏季、日本海沖合域におけるスルメイカ漁は全般的に低調であり、日本海区水産研究所および関係機関が実施したスルメイカ漁場一斉調査結果でも、2003年のスルメイカ資源は近年の高水準レベルよりも低い水準にあったと考えられている。

冬季の島根県西部海域における2003年発生群の漁獲量が少ないのは、回遊経路だけでなく、資源量が少なかったことが一つの要因と考えられる。

(2) ケンサキイカ

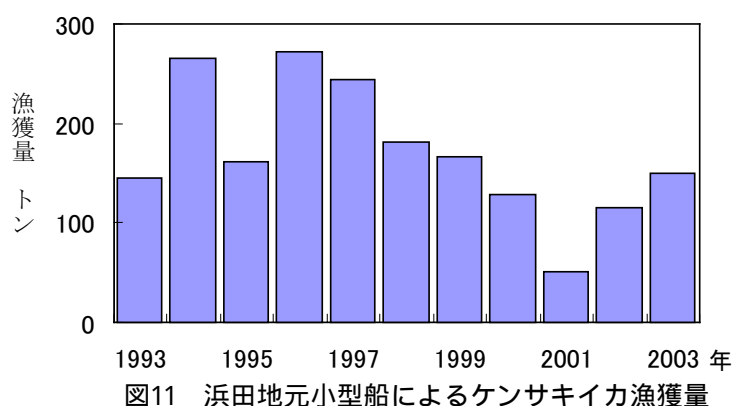


図11 浜田地元小型船によるケンサキイカ漁獲量

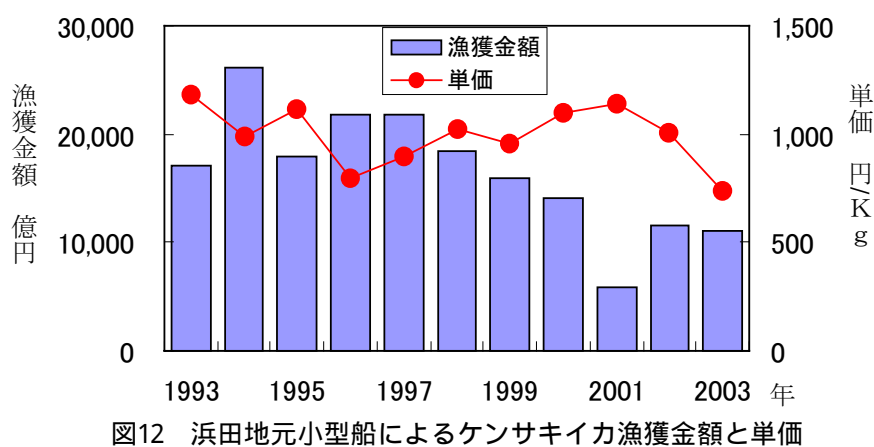


図12 浜田地元小型船によるケンサキイカ漁獲金額と単価

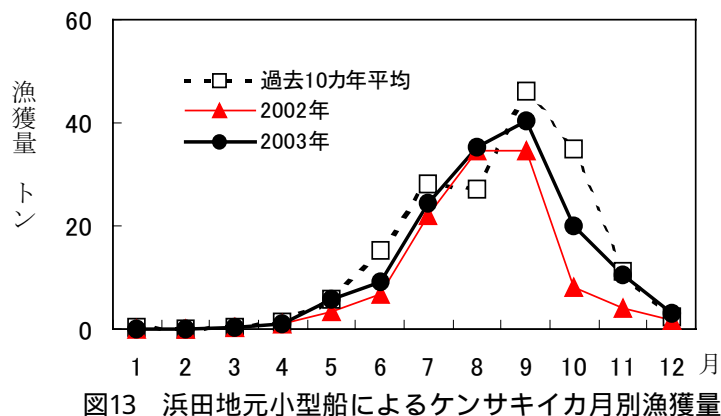


図13 浜田地元小型船によるケンサキイカ月別漁獲量

島根県西部海域を主漁場としている小型イカ釣漁船によるケンサキイカの漁獲動向を図11～13に示す。2003年の漁獲量は150トンと、前年(115トン)の131%、平年(過去10カ年平均:173トン)の87%と2001年に大きく減少した漁獲量はやや回復した(図11)。漁獲金額は1億1,110万円で、前年(1億1,502万円)の97%、平年(1億7,079万円)の65%と前年・平年を下回った。また、単価は740円/kgで、前年(1,003円/kg)の74%、平年(987円/kg)の75%と漁獲量増加の影響で前年・平年を下回った。(図12)。

2003年は8月、9月に漁獲のピークが見られ、10月に減少したもののほぼ平年並みの漁獲パターンとなった。(図13)。

ケンサキイカの漁獲量は1996年以降減少傾向で、2001年には51トンまで減少したが、2002年、2003年と増加し、ほぼ平年並みの漁獲量水準にまで回復した。しかし、再生産関係が特定できない本種の場合、2001年のように急激な漁獲量の減少も起こりうるため、漁況予測をすることは非常に困難である。

3. 沖合底びき網漁業

本漁業は東経128度以东の日本海南西海域を漁場としており、現在7ヶ統が操業している。操業期間は8月16日から翌年5月31日までで、6月1日から8月15日までは禁漁期間である。ここでは統計上、漁期年を用い、1漁期を8月16日から翌年5月31日までとした。

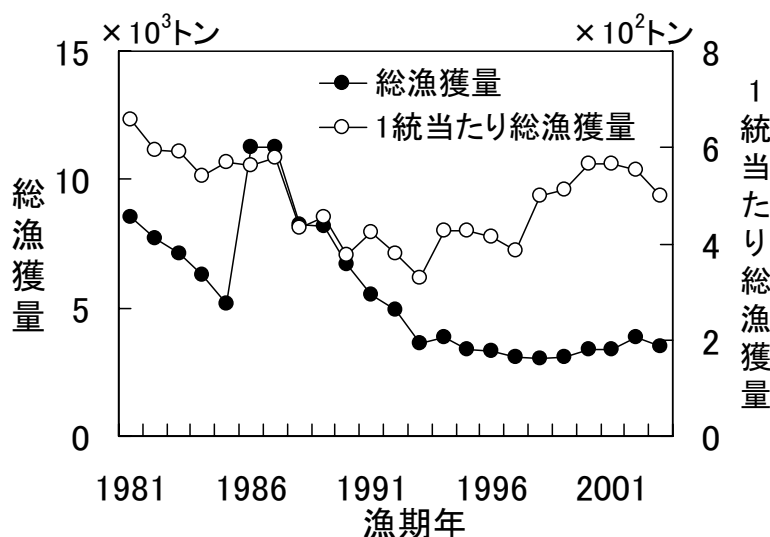


図14 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業における総漁獲量と1統当たり総漁獲量の経年変化

水揚げ金額は17億円、1統当たり水揚げ金額は2億4,290万円で、日韓新漁業協定発効以降、初めて2.5億円を下回った。

今漁期は、休漁明け当初からエチゼンクラゲ大発生による大量入網により、通常通りの操業が出来ない、漁具の破網といった被害を受け、エチゼンクラゲの分布量の多い海域を避けながらの操業となった。特に9月から12月にかけての被害が大きく、この間の漁獲量は過去5ヶ年平均を32~5%下回り、低調に推移した。

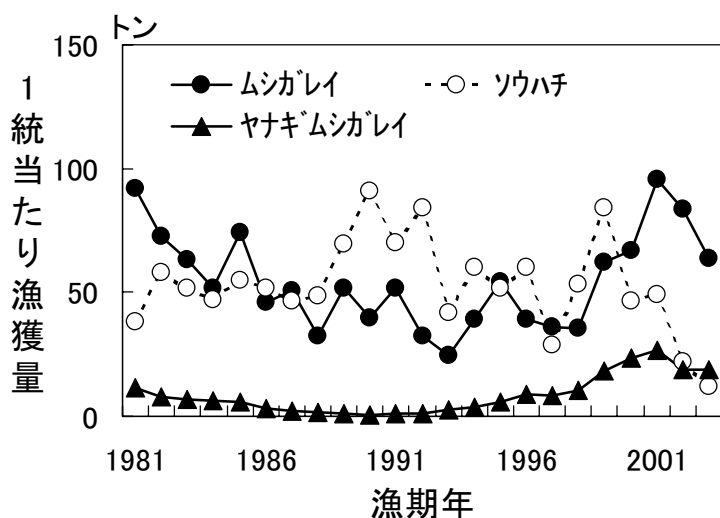


図15 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業におけるカレイ類の1統当たり漁獲量の経年変化

(1) 全体の漁獲動向

図14に1981年以降の浜田港を基地とする沖合底びき網漁業(以下、浜田沖底という)における総漁獲量と1統当たり漁獲量(以下、CPUEという)の経年変化を示す。

総漁獲量は、操業統数の減少により急激に減少したが、1993年以降3,000トン台で推移している。一方、CPUEは日韓新漁業協定が発効された1998年以降急増し、近年は500トン台で推移している。

2003年の浜田沖底の総漁獲量は前漁期を10%下回る3,499トン、CPUEは500トンであった。また、総

(2) 主要魚種の漁獲動向

①カレイ類

図15にカレイ類のCPUEの経年変化を示す。

ムシガレイは1991年以降、周期的な増減を繰り返し、近年は減少傾向にある。2003年の漁獲量は447トン、CPUEは64トンで、前年を24%下回ったが、平年(1981年~2002年平均)を18%上回った。

ソウハチは1990年以降、大きな変動を示しながら減少傾向にある。特に1999年以降は急減し、3ヶ年で

1/4まで減少した。2003年の漁獲量は84トンで、1981年以降初めて100トンを下回る水揚げとなった。CPUEは12トンで、前年の56%、平年の22%に留まり、過去最低の水揚げとなった。

また、ヤナギムシガレイはムシガレイと同様に1991年以降増加傾向にあり、1998年には10トン/統を越えるまでに回復した。2003年の漁獲量は133トン、CPUEは19トンで、平年の2.4倍の水揚げがあった。

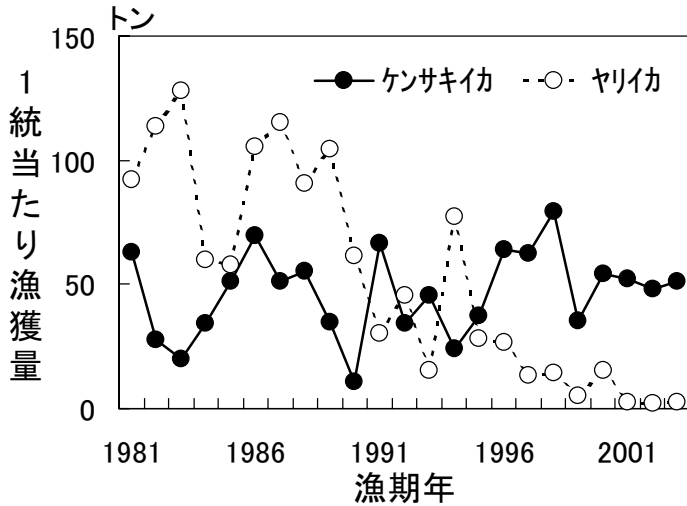


図16 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業におけるイカ類の1統当たり漁獲量の経年変化

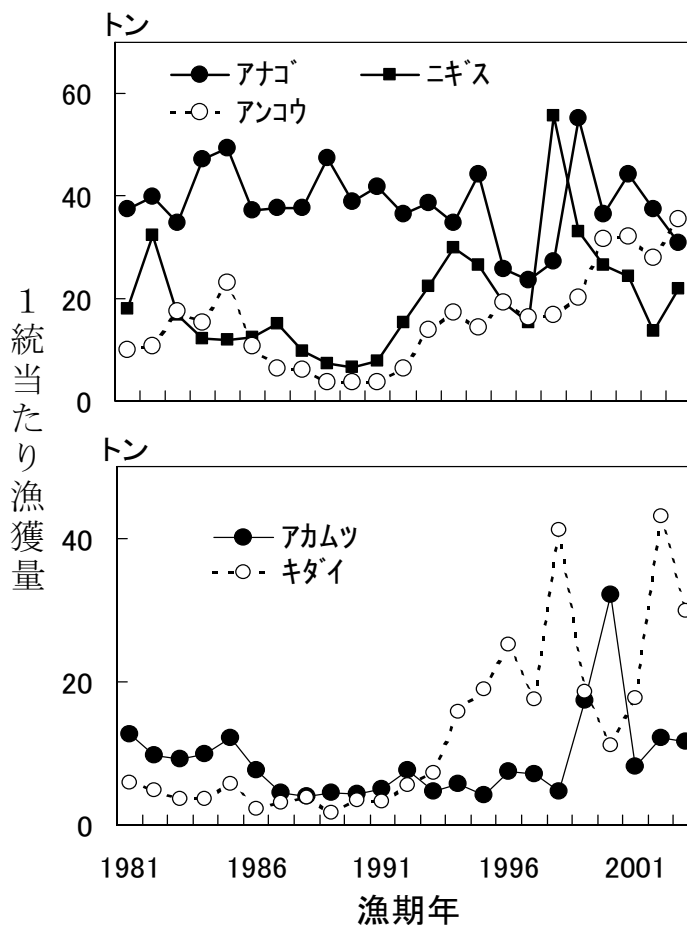


図17 浜田港と基地とする沖合底びき網漁業における主要種の1統当たり漁獲量の経年変化

②イカ類

図16にイカ類のCPUEの経年変化を示す。

ケンサキイカは周期的に大きな変動を示し、近年は横這い傾向にある。2003年は秋漁が好調に推移し、漁獲量は360トン、CPUEは51トンで、前年を7%、平年を11%上回った。

一方、ヤリイカは1990年以降急激に減少し、近年は横這い傾向にある。2003年の漁獲量は19トン、CPUEは3トンであった。特に、2001年以降、漁獲量は10トン台、CPUEは一桁台で推移しており、資源的に危機的な状況にあることが伺える。

③その他

図17に沖合底びき網漁業で漁獲されるカレイ類、イカ類以外の主要魚種におけるCPUEの経年変化を示す。

アナゴは1995年以降、周期的な増減を示し、近年は減少傾向にある。2003年の漁獲量は217トン、CPUEは31トンで、前年を17%、平年を20%下回った。

アンコウは1990年代に入り増加傾向にある。2003年の漁獲量は248トン、CPUEは35トンで、前年の1.3倍、平年の2.4倍となり、1981年以降最高の水揚げとなった。

ニギスは1998年をピークに急激な減少傾向にある。2003年の漁獲量は153トン、CPUEは22トンで、前年を61%、平年を11%上回った。

キダイは1994年以降、周期的な増減を

繰り返している。2003年の漁獲量は209トン、CPUEは30トンで、前年を31%下回ったが、平年の2.5倍の水揚げがあった。

アカムツは1999年、2000年と急増したものの2001年以降横這い傾向にある。2003年は春先に小型魚がまとまって漁獲され、漁獲量は81トン、CPUEは12トンで、平年の1.3倍の水揚げがあった。

4. 小型底びき網漁業第1種

本漁業は山口県との県境北西沖から隠岐海峡にかけての水深80～180mの海域を漁場とし、現在60隻が操業を行なっている。操業期間は9月1日から翌年5月31日までである（6月1日から8月31日までは禁漁期間）。ここでは統計上、漁期年を用い、1漁期を9月1日から翌年5月31日までとした。なお、ここでは温泉津漁協所属船を除く60隻分の集計値を用いた。

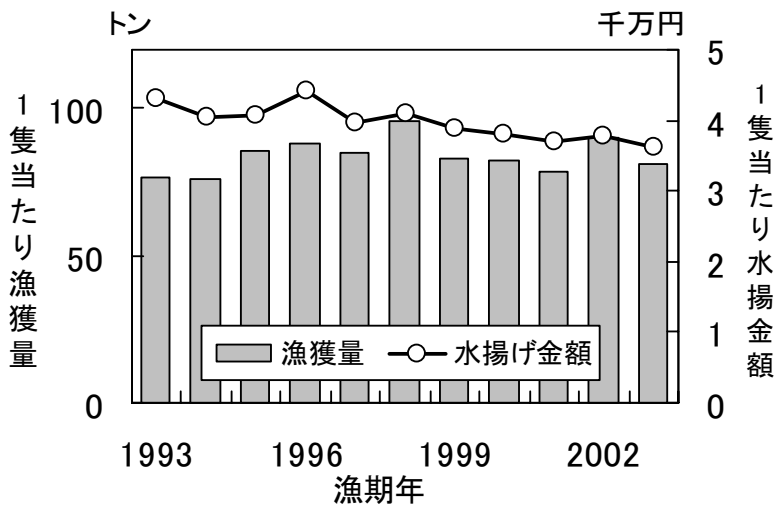


図18 小型底びき網漁業における1隻当たり漁獲量と水揚げ金額の経年変化

(1) 全体の漁獲動向

図18に1993年以降の小型底びき網漁業(以下、小底という)における1隻当たり漁獲量と水揚げ金額の経年変化を示す。

2003年の小底全体の総漁獲量は4,799トン、総水揚げ金額は21億3,223万円であった。一方、1隻当たり漁獲量は81トン、水揚げ金額は3,614万円で、前年に比べ、漁獲量は9%、水揚げ金額は4%下回った。また、1隻当たり操業日数は133日で前年並みであった。今漁期は休漁明け当初からエチゼンクラゲ大発生的大量入網により、漁具の破網、選別作業に時間を要したことによる操業回数の減少といった影響を受けた。

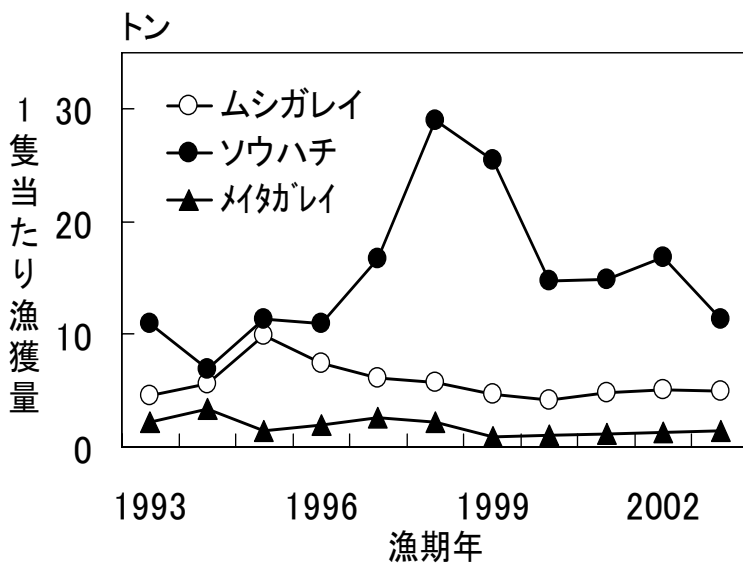


図19 小型底びき網漁業におけるカレイ類の1隻当たり漁獲量の経年変化

(2) 主要魚種の漁獲動向

①カレイ類

図19にカレイ類の1隻当たり漁獲量(以下、CPUEという)の経年変化を示す。

ムシガレイのCPUEは1996年以降減少傾向にある。2003年の漁獲量は293トン、CPUEは平年を15%下回る5.0トンで

あった。

2000年以降、急減したソウハチの漁獲量は673トン、CPUEは11.4トンで、前年を32%、平年を28%下回った。

メイタガレイの漁獲量は88トン、CPUEは1.5トンで、前年を11%上回ったが、平年の8割の水揚げに留まった。

この他のカレイ類のCPUEを平年値と比較すると、ヤナギムシガレイ(1.6トン)は11%増、アカガレイ(0.4トン)は26%増、ヒレグロ(2.8トン)は2.3倍の水揚げがあった。

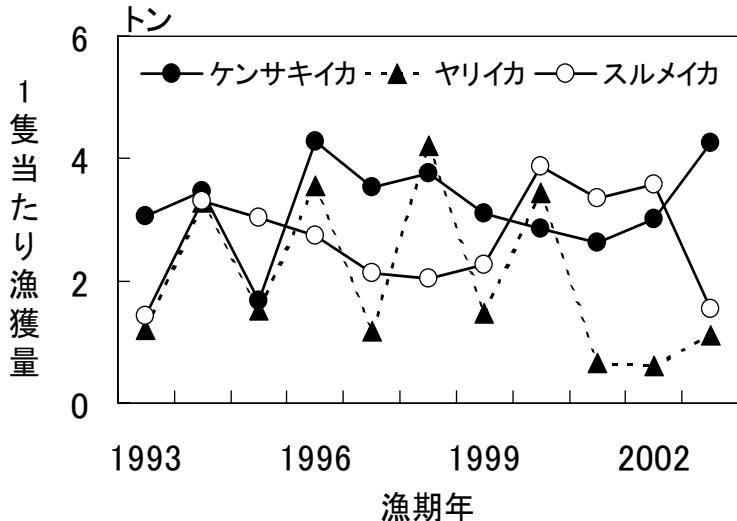


図20 小型底びき網漁業におけるイカ類の1隻当たり漁獲量の経年変化

②イカ類

図20にイカ類のCPUEの経年変化を示す。

ケンサキイカのCPUEは2001年以降増加傾向にある。2003年は秋漁が好調に推移し、漁獲量は252トン、CPUEは4.3トンで、前年、平年の1.4倍の水揚げがあった。

一方、ヤリイカのCPUEは2001年までは1年おきに好不漁を繰り返していた。2003年の漁獲量は65トン、CPUEは1.1トンで前年を上回ったが、平年の1/2の水揚げに留まり、3年連続の不漁となった。

スルメイカの2003年の漁獲量は90トン、CPUEは1.5トンで、前年の1/2以下の水揚げとなり、1993年に次ぐ低い値となった。

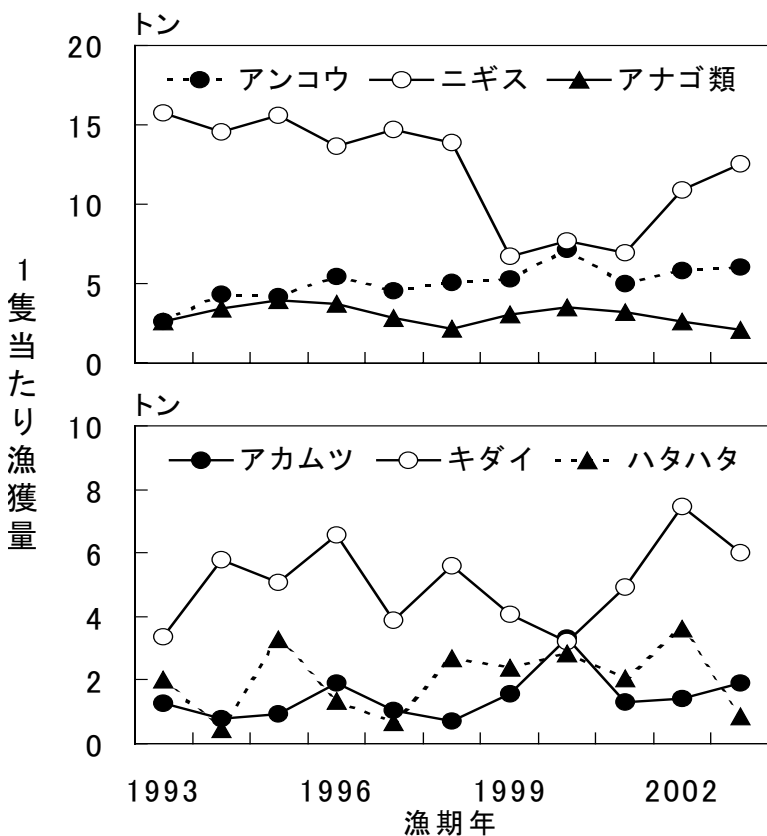


図21 小型底びき網漁業における其他主要魚種の1隻当たり漁獲量の経年変化

③その他

図21に小底で漁獲されるカレイ類、イカ類以外の主要種におけるCPUEの経年変化を示す。

近年増加傾向にあるアンコウは中型魚を中心に357トンの水揚げがあった。CPUEは6.1トンで、平年を22%上回った。

今漁期のニギスは漁期を通して好調に推移したことから量がまとまり、漁獲量は741トン、CPUE

は前年を15%上回る12.6トンであった。

アナゴ類の漁獲量は122トン、CPUEは2.1トンで、前年を21%、平年を34%下回った。

周期的な変動を示すアカムツの漁獲量は113トン、CPUEは1.9トンで前年・平年の1.3倍の水揚げがあった。

キダイの漁獲量は355トン、CPUEは6.0トンで、前年を20%下回ったが、平年の1.2倍の水揚げがあった。

ハタハタの漁獲量は51トン、CPUEは0.9トンであった。春漁が低調に推移したため平年の40%の水揚げに留まり、1994、1997年に次ぐ低い値となった。

このほか、秋季にはイボダイがまとまって漁獲され、漁獲量は255トン、CPUEは4.3トンで、過去5年平均の3.3倍の水揚げがあった。